

制服を着替えさせる

— 公立中学校の生徒指導のエスノグラフィ(1) —

濱元 伸彦（貝塚市立第一中学校）

1. 問題の所在

本発表の目的は、大阪府南部の一公立中学校で服装指導の一環として行われている「制服を着替えさせる」という教師（集団）の行為を学校文化の一部として扱い、記述を試みることにある。

1980年代、校内暴力等の問題が大きくクローズアップされる中、制服の指導は学校による管理・統制の象徴と見なされた（片瀬2003）。そして、学校の管理・統制に対抗する反学校的文化として「ツッパリファッション」も生まれ、それらはテレビドラマやマンガでも扱われた。制服による管理・統制の時代は終わったとの見方もあるが（山田2003）、制服をめぐる教師と生徒のせめぎ合いは現在でも続いている。少なくとも、筆者の勤務する大阪府では…。

「制服を着替えさせる」とは、中学校の規定から逸脱した制服を着て登校した生徒を教師が呼び、学校で保管する制服を貸して着替えさせることを意味する。そうした行為は、様々な形で存在する中学校の生徒指導のごく一部であり、なぜそのような些事に注目するのか疑問をもたれると思われるので、先に研究の意義を述べておこう。ここ10年、学力向上が政策目標の一つとして掲げられ、教師の資質向上や組織改革、授業方法の改善が求められてきた。それらは多かれ少なかれ学校の中に浸透してはいるものの、中学校教師の日々の仕事の重点は依然、学校のルールをいかに生徒に守らせ、学校生活の秩序を維持するかにある。校区に多くの経済的に厳しい家庭を抱える学校が多い大阪では、なおさらそうした生徒指導の側面に教師のエネルギーの多くが費やされる。そうした指導の一面を描写することは、学校外からやってくる改革が、なぜ一部の学校では進行しにくいのかを考察する手立てになるだろう。

一方で、「制服を着替えさせる」行為は生徒の服装違反に対する教師の温情措置（あるいは乗り越えられないための対抗措置）であるが、「制服」とはまさにシンボルであり、それをめぐる教師/生徒の争いもまたシンボリックな争い

であり、社会/人類学的な視点においても興味深い問題である。「制服」というシンボルをめぐる争いの背景には、教師/生徒のそれぞれの信念や欲求があるわけだが、学校外にいる人から見れば実に詰まらない教師/生徒間の争いに見えるだろう。しかしながら、生徒の著しい服装違反を取り締まるかどうかは教師集団にとって指導力の是非を問われる重大な問題であり、他方、生徒にとっては自身のアイデンティティや仲間との関係に関わる問題である。また、それを完全に取り締まらない原因として、生徒の保護者との関係や、教師の学年集団間での指導の微妙な違いも存在する。「制服を着替えさせる」という行為に焦点を置き文化的記述を試みることで、学校文化の特異性を別の角度から描くことができるかもしれない。

最後に、本発表は、教師である筆者の「実践者のエスノグラフィ」であり、筆者自身がいわば「制服を着替えさせる」仲間の一員であるが、自分自身の信念や見方を出来る限り対象化し記述を試みたい。

2. 研究方法

筆者はK市の公立中学校に務める教師である。本発表は、筆者が勤務したK市立A中学校において、2010年度に教諭として勤務する傍ら、所属する学年で日々生起する様々な生徒指導事象について行ってきた調査に基づくものである。主なデータは、生徒指導に関わる出来事についてのメモやそれを取り巻く生徒、教師たちの声を週末など時間のある時にまとめたフィールドノートである。

A中学校は、大阪府の南部、関西空港に近いエリアに位置するK市にあり、一学年8クラス（全体で24クラス）という同エリアでは比較的規模の大きい公立中学校である。同市につとめる教師たちの認識としては、A中学校の校区の平均的な社会経済レベルは市内で中の上であり、生徒指導のレベルも同市の中では「まだ楽なほう」と思われている。しかし、校区が非常に広く、生徒数も多いため、家庭背景に課題を持つ生徒の数も多い。本発表の関心で言

うと、服装に違反のある生徒は、年によってばらつきがあるが、常に各学年に10人程度は存在する。

3. エスノグラフィ

① 何が違反にあたるか

例えば、教職経験のない教師が4月からA中で担任を始めたとして、まず何が違反の対象になるのか分からないはずである。A中では制服の左胸に名札を縫い付けねばならず、女子は白い夏服には紺色のリボン、冬服にはネクタイをつけなければならない。名札やリボンがない生徒には教師は注意を与え、付けてくることを確認しなければならないが、それすらも、初任者ではたくさんの生徒を前にして、見落としがちである。服装について指導できるようになるためには、教師は何が違反であるか十分に「目を養う」必要があり、担当する学級や学年の生徒の服装を授業時間中も休憩時間中も鋭く観察し、○か×かを瞬時に判断できなければならない。

服装のチェックポイントは多々あるが、その中で特に教師が警戒しているのは、「変形」の恐れのあるズボン、学ラン（夏ならシャツ）、スカートである。具体的には、胴回りに合わない幅広いズボンや裾を縮めた（ボンタンと呼ばれる）ズボン、胴回りの下部をカットして短くした学ラン（あるいは異様に長い長ラン）、短くカットしたスカートである。

これらの違反制服の中で、特に男子によく見られるのが「太いズボン」である。学校指定の業者が作る制服には通常「標準マーク」がプリントされており、それがいないものは違反であると判定しやすいが、「太いズボン」は生徒が指定業者から（実寸より20～40cmウェストが太いものを）正規に購入することで比較的容易に手に入る。また、体格の大きかった兄のお古を貰い受けることも可能である。

一方、「変形制服」（短ラン、ドカン、ボンタン）は、特別なルートでしか手に入らないものである。ごく一部の男子生徒が、卒業生から貰い受けたり（あるいは売りつけられたり）、インターネットで購入するなどして生徒は手に入られる。

女子のスカートに関しては、男子ほどバラエティはないが、自分でスカートを切り、裾を縫って処理し、履いてくることがある。

以上のようなズボンやスカートは、A中の教師の中で、すべて着替えの対象として考えられている。

② 「着替え」の必要な生徒を持つ担任の一日

「着替え」の必要な生徒を抱えるクラスの担任は忙しい。着替えの必要な生徒は、朝の朝礼からクラスにいるとは限らない。大抵かれらは遅れて現れるが、いつ来るかは分らない。担任の教師は平均して1～2時間は授業が空きの時間があるが（ない日もある）、その時間帯に来てくれると対応がしやすい。しかし、それ以外の時間に学校に来て、教師のチェックを受けずに教室に入ってしまうこともある。その場合、次の休み時間、わずかな時間を使って、生徒に声をかけ、着替えるよう促さねばならない。

対象となる生徒が、その日どんな気持ちで登校するかも重要である。例えば、教師が「おい、今日もあかんズボン履いてきてるやないか。履き替えやのう。」と朗らかに声をかけた時に、生徒が「くっそー、バレたか。」と笑って答えてくれる状態であればよい。しかし、当人がなぜかむしゃくしゃしており、「うっさいんじゃ！」と最初から反発してくるなら履き替えにいたるまでにかなり時間が必要であることが予想される。

違反制服を着用してくる生徒としては、その動機はどうであるにせよ、その違反を見つからず下校までの時間を送りたいと基本的に考えている。見つかれば、着替えさせられることが分かっているのも、自分から「違反ズボンを履いてきました」と名乗りでてくる者はいない。それゆえ、着替えにいたるまでには、教師からの「発見」と「声かけ」が不可欠である。声をかけられた生徒は、スムーズなパターンとしては、生徒相談室と呼ばれる別室に教師と共に行き、学校が貸し出し用に保有している制服の中で、体にあったものを渡され着替えさせられる。そして、違反した制服は教師が一時的に預かる。こうして、相談室を出た生徒は、「授業を受けられる身」となり、晴れて教室に入ることができるのである。一仕事を終え、教師はようやくほっと一息つける。これで今日もようやく「アイツ」を授業に入れることができたのだ。

しかし、このようにスムーズに行かない場合もある。声をかけられ、職員室や生徒相談室に連れてこられても、教師の説得に応じず、着替えを拒否する場合である。生徒の反発の仕方やレトリックは様々だが、生徒が着替えをすることを受け入れない以上、無理矢理着替えさせることもできないため、しばしば膠着状態に陥る。